九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

遠藤周作における歴史小説創作の意味 ： 『王国への道 山田長政』から

井上, 絵里
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年

https://doi.org/10.15017/11032

出版情報：九大日文. 10, pp.38-51, 2007-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

遠藤周作における歴史小説創作の意味

――『王国への道　山田長政』から――

井上　絵里

一　はじめに

単行本として刊行された『王国への道　山田長政』[1]（一九八一年四月　平凡社、以下『王国への道』と表記）の帯には、「最新長編歴史小説」と記された下に次のように書かれている。

「地上の王国」を築こうとする山田長政と「天上の天国」をめざすペドロ岐部――二人の男の壮烈な生き方を通し、「日本人とは何か」をさぐる。

これによると、歴史小説『王国への道』は、「日本人とは何か」という問いに対して山田長政（以下、長政と表記）とペドロ岐部（以下、岐部と表記）を通して答えに迫っているということになるが、この問いは遠藤周作が繰り返し問い続けてきた問題である。これについて、武田友寿は「遠藤周作論」（『国文学解釈と鑑賞　別冊』所収　一九九五年一月　至文堂）で、「遠藤周作（文学）と『聖書』の関係」として表にまとめている。すなわち、『海と毒薬』（一九五八年四月　文藝春秋新社）では「日本人の罪意識」を主題とし、『沈黙』（一九六六年三月　新潮社）は「キリスト教の変容」、つまり日本という土壌で変化したキリスト教を主題に、『侍』（一九八〇年四月　新潮社）は「信仰の意味の探求」、これも主人公の日本人から窺う信仰の意味への問いであるが、このように遠藤周作は時期によってテーマの差は各々あるものの、「日本人」という問題を追求し、それらの作品を数多く残した作家とされる。

同様に、『王国への道』でも長政と岐部という日本人から「日本人とは何か」を問うているわけだが、ここで留意したいのは長政という人物を描いていることである。これまで遠藤周作は、自身が信仰するキリスト教に関連した日本人、又はキリスト教と対峙した上でキリスト教の土着化を問いながら日本という国を、そしてキリスト教信仰を持たない日本人を描いてきている。先程挙げた小説でいうと『海と毒薬』ではキリスト教の土壌がないとされる日本で行われた生体解剖実験を描き、『沈黙』ではキリスト教徒とその周縁の日本人を、『侍』ではキリスト教を享受していく日本人を主体としている。しかし『王国への道』はというと、小説上では長政とキリスト教徒の岐部が対比して描かれるものの、主役である長政は、もともとキリスト教に無縁の人物である。この長政を遠藤周作はなぜ書き記したのか。先に触れたように、長政はキリスト教徒の岐部を相対化するために用意された一日本人と考えることも出来るが、そう考える

と『王国への道』全体で長政の描写が岐部の描写より十倍近く多くのページを割いて描かれていることに疑問が残り、また副題にも標されている「山田長政」から分かるように長政を主役としていることに納得が出来ない。それでは、『王国への道』に描かれる長政は遠藤が何を背負わせて描いた日本人なのか。本稿では、遠藤が長政に内包させた日本人像を追いながら、長政という歴史上の人物を主役に選び、歴史小説として『王国への道』を書いた理由に迫っていきたい。

二　『王国への道』論の意味

遠藤周作は、生前の一九七五年に全集（全十一巻）を、一九九五年には歴史小説集（全七巻）を刊行しており、また、死後の一九九九年には二度目の全集(全十五巻)を刊行しているが、初の全集刊行時は、『王国への道』の発表前であり、二度目に刊行された全集と歴史小説集についても、そのどちらにも『王国への道』は所収されていない。また、『王国への道』を主として研究したものは今のところ発見できず、『王国への道』に登場する、岐部を描いた評伝『銃と十字架』（一九七八年一月　中央公論社）の先行研究の中で、『王国への道』が触れられる程度である。同様に、長政と岐部を描いた戯曲『メナム河の日本人』（一九七三年九月　新潮社）の先行研究の中でも『王国への道』が触れられる事があるが、遠藤のいわゆる純文学作品といわれる『海と毒薬』や『沈黙』、『深い河』等の先行研究と比べると、その数は圧倒的に少ない。

以上の点をふまえて、なぜ『王国への道』を取り上げるかというと、一点目として、『王国への道』以前に、遠藤は長政と岐部を題材として、戯曲『メナム河の日本人』と評伝『銃と十字架』の二作品を書いており、これらの延長線上に『王国への道』が存在することが挙げられる。つまり、戯曲、評伝と性質を異にするものではあるが、『メナム河の日本人』、『銃と十字架』を書いた上で、不足な点を『王国への道』で表現しているといえる。そして、二点目として、キリスト教徒ではない山田長政を『王国への道』で主役に据えている点である。遠藤は、『王国への道』以前に、小西行長を題材に、評伝『鉄の首枷』（一九七七年四月　中央公論社）と歴史小説『宿敵』（一九八五年十二月　角川書店）を刊行している。しかし、評伝、歴史小説のどちらの主人公も小西行長である場合と異なり、評伝『銃と十字架』は岐部を追ったものに対して、『王国への道』は長政が主人公であり岐部は脇役でしかない。繰り返しになるが、岐部を主人公として『王国への道』を描くことも可能だったはずであり、遠藤が、キリシタンではない長政を主人公に設定した背景を探ることが『王国への道』を取り上げる二点目の理由である。

以上の理由によって『王国への道』論を展開していく訳だが、では『王国への道』の長政と岐部は、遠藤がどのように創作した人物なのだろうか。ここで、現在明らかにされている彼らの人物像について、その概要を掴みたい。

まず長政[2]についてだが、日本では、海外で活躍した日本人

というイメージが朧げに浸透しているが、彼がアユタヤに渡る以前の日本での生活はほぼ不明であり、日本からアユタヤに渡航した経緯も、どのような手段を使ってアユタヤへ赴いたのかも明らかではない。また、長政がアユタヤにいた時代のアユタヤ関連の文献については、遠藤が『王国への道』の日本町を描く際に重宝したという『南洋日本町の研究』の著者・岩生成一と遠藤との対談（『日本人を語る』一九七四年十二月　小学館）の中で「シャムはアユチヤ王朝が一七六〇年代にビルマから侵入されて、町をすっかり焼かれてしまい、略奪された。だから、アユチヤ王朝の記録は何もない」と岩生は語っている。

遠藤は歴史小説を書くとき、その歴史について詳細に調査した上で執筆を始めることで知られているが、『王国への道』執筆に関しても同じく綿密な調査の下と思われる。だが、ここまで述べてきたように長政についての研究はアユタヤに渡って以降から断片的に明確になっている事実があるのみで、『王国への道』に描かれる長政が、日本からマカオ、そしてアユタヤへと渡って行く様子は遠藤の完全な創作といえる。

一方、長政と対比して描かれる岐部[3]に関していうと、長政の人生が曖昧な部分が多い一方で、岐部の人生は日本での生活からローマへと渡り日本へと戻って来る過程全体が長政よりは明らかといえる。なぜなら、日本で初めて作られた神学校・有馬セミナリオで学んだ岐部は、このセミナリオの創始者・ヴァリニャーノの日本でのキリスト教布教に関してや、また神学校などについて頻繁にローマに書簡を送っており、また、ローマから日本へと戻ってくる過程では、ローマの地で神父となった岐部自身がローマに書簡を送り、それらの書簡が現在も残っているからである。しかし、禁教令により日本から追放されマカオへと行き、その後ローマへと辿った過程については不明な点が多い。この岐部に関して遠藤は、切支丹史の研究を行っているフーベルト・チースリクの元で友人である三浦朱門とともに「講義」[4]を受けている。それは、岐部個人に関して学ぶ「講義」というよりは、江戸時代に殉教した人物と棄教した人物に関して、不明な点の多い彼らの人生を繋ぎ合わせる作業を行なっていたようである。その中の一人として、岐部の存在があったと思われる。

また、小説上では対比される長政と岐部だが、彼らが国外追放の船で出会う場面は遠藤の創作である。つまり、小説の軸となる二人の接点は創作されたものであり、彼ら二人を対比した『王国への道』の構成は、長政および岐部を扱った他の文献では見られない設定といえるだろう。

三　戯曲から評伝へ、評伝から歴史小説へ

遠藤は、戯曲『メナム河の日本人』刊行後、「廃墟と芝居」と題して「波」（一九七三年十一月）に次のように綴っている。

塔の一つ一つがそこで生きた人間の一人一人の姿のように見え、黒いパコダの塔の焼け跡も、彼等の情熱の炎がそこ

に残したもののように思えた。その時、ふと、芝居が終った劇場の舞台と客席を思い出したのは何故だろう。（略）だから私は、眼前の崩れおちたパコダをかつての華麗な寺院に復元し、草に埋れた礎石の上に王宮の広間を作りなおし、そこに陰謀家や王や王妃や、そして山田長政を歩かせて芝居を書きたいと思った。

遠藤は演劇の舞台と長政のいたアユタヤの繁栄から荒廃までを重ね合わせ、「山田長政を歩かせて芝居を書きたいと思った」と語っているわけだが、戯曲を創作し始めたきっかけは何だったのだろうか。

『メナム河の日本人』が描かれたのは一九七三年である。遠藤にとって戯曲としては五篇目の作品で、処女作は「女王」(5)であり、同年、劇団「四季」により公演されている。この「女王」は、「文学界」（一九五七年十二月号）の一幕物戯曲特集に際して、遠藤が作家として初めて書いた戯曲である。つまり、遠藤が戯曲を描くようになったきっかけは雑誌の企画ということだが、「女王」をはじめとして遠藤は、全部で六篇の戯曲を発表している。それらを年代順に挙げると、「親和力」（劇団「同人会」のための書き下ろし　一九五九年二月）、「女王」、「黄金の国」（「文藝」一九六六年五月）、「薔薇の館」（「文学界」一九六九年十月）、『メナム河の日本人』（一九七三年　新潮社）、『喜劇　新四谷怪談』（一九七四年　新潮社）という作品群である。以上六篇の内の一篇が『メナム河の日本人』なのだが、ここで『メナム河の日本人』の概略を示すと次のようである。アユタヤ王宮の傭兵として最高位の称号を得ている山田長政の登場から始まり、その長政が、王宮の主権争いにおいて自分の出世を考えつつ上手く立ち回る様子が描かれる。しかし、長政が、ビルマとの戦いにおいて勝利を導き王朝の栄華を存続させていくその途中で、アユタヤ王宮のクンサワット侍従長により毒殺され長政は最期を迎えるという物語である。『メナム河の日本人』は、長政の活躍から最期まで描くという点で『王国への道』と同様であり、日本への帰国途中にアユタヤを訪れた岐部もまた描かれている。つまり、『王国への道』のように、キリスト教と関わりを持たない長政が出世のために進む道と、司祭である岐部が殉教へと進む道とが対比された構成となっているのである。しかし、『メナム河の日本人』と『王国への道』を比較すると、長政を毒殺する人物や、『王国への道』には登場しない人物が描かれている点など人物に関する設定や、長政の人柄の描かれ方にも相違が見受けられる。では、『メナム河の日本人』と『王国への道』を比較したとき、山田長政という人物の描かれ方は、いかに変遷しているのか。『王国への道』が小説であるのに対し、『メナム河の日本人』が戯曲であることを踏まえ、戯曲の特色をおさえながら描かれた長政像の変遷を辿っていきたい。

まず戯曲の特色に触れると、小説は読者という相手がいるのに対し、戯曲は演劇を観賞する観客という相手が存在する点が挙げられる。この読者と観客の違いとは、読者はその場で本を再読できるが、観客はその瞬間に巻き戻して演劇を見直すこと

が出来ないことである。ここで、工藤隆の『演劇とはなにか』（一九八九年五月　三一書房）から小説と戯曲の相違について引用すると次のようである。

同じくことばを用いているとはいえ、小説と戯曲では方向性が逆なのである。小説など文学は、文学言語内での完結を目ざす。しかし戯曲は、あくまでも俳優によって演じられるための台本でしかない。つまり、主眼は上演行為全体の中にあるのであって、文字言語内での完結というのは、あくまでも従なのである。

工藤の言うように、戯曲はそれ自体が完成品ではなく、戯曲とは上演する目的で書かれた演劇の脚本であり、それをもとに劇が繰り広げられることでひとつの表現として完成していくものである。確かに、戯曲それ自体を読み鑑賞する人もいるだろうが、本来は演劇のために書かれた脚本にすぎず、遠藤の描いた戯曲も、劇団「四季」、「同人会」、「雲」、「青年座」によってそれぞれ演じられている。そして、戯曲それ自体は完成品ではないという延長線上に、演出家と役者の存在があげられる。この点について遠藤は、「小説方法と戯曲方法」（「東京新聞」一九六六年三月十一日）の中で次のように語っている。

小説の場合、生きた人間を書くため小説家は色々苦労する。彼は自分の作中人物の内側だけでなく、その外形、容貌、癖などもつかまえておかねばならない。戯曲の場合、私はこのようなわずらわしさにとらえられないのがうれしかった。

遠藤は、人物の「外形、容貌、癖など」小説で必要とされるものを排除して、戯曲を描くことが出来ると語っている。つまり、遠藤の描く戯曲において、人物の外形などそれらは演出家が指導し、役者が担っていることになる。しかし遠藤は、戯曲を描く際に小説を描くときのような「わずらわしさ」がないとする反面、苦労を感じない訳ではなかったようだ。

小説の場合は幕が下りなくても小説なんですよ。しかし芝居はどうしても、幕が下りなくちゃいけないわけだよ。幕が下りるということは、ある完了……自分の中に持っているものが完了しなかったら、幕が下りるはずがない。

これは、芥川比呂志と遠藤との対談「作者と演出家」（「海」六―一号　一九七四年）の中で、遠藤が語っているものだが、戯曲は小説とは異なり「幕が下りる」ことが必要、つまり戯曲を構成する台詞は、小説の読後にテーマの曖昧さと共に余韻を漂わせるものであってはならないと述べている。以上のような戯曲の特徴を踏まえて、遠藤は戯曲『メナム河の日本人』の中で、どんな山田長政像を表出したのか。この点を明確にするため、『王国への道』と比較しながら、この戯曲を辿っていきたい。

先にも述べたように、『メナム河の日本人』と『王国への道』どちらとも、長政と岐部が対比された構成となっている。例えば、『メナム河の日本人』では、岐部とともに登場するモレホン神父の説くキリスト教に対して、長政は「眼にみえぬむなしい風を掴んで何になる。手でつかめるもの、眼でみえるもの、そのほかは信じるわけにはいかぬ。」と話しているのと同様に、『王国への道』においても、アユタヤの地でマカオ以来に再会した岐部の話す神に対して、長政は「俺は目に見えぬものしか信じぬ。目に見える力、目にみえる生きざましか信じぬ」と答えている。このように、岐部の説くキリスト教に、長政自身は興味を示さない設定は、『メナム河の日本人』『王国への道』どちらも同じ構造である。

しかし、この二つの作品を比較したとき、『王国への道』の長政は、小説随所で「人のよい笑い」を見せるが、『メナム河の日本人』にはこの笑いは描かれていないことに気づく。また、この長政の笑いは、『王国への道』において、周囲に親しみを抱かせるといった効果として使用されているが、『メナム河の日本人』では長政のこの笑いが描かれていない事を考慮しても、長政自身が力強い印象を受ける。『王国への道』でも、長政は確かに強さを持つ人物として描かれているが、『メナム河の日本人』では、言動自体に強さを持っているのである。

五郎左衛門　長政殿。我等を抜きにして一人思案され、もし失敗ったら、どうされるのじゃ。

長政　この長政が……失敗る筈はない。今日まで、誰が日本人町をここまでに作りあげたと思う。俺は今、傷を負って気が立っているのだ。さ、あっちへいってくれ。せねばならぬことが俺にはあまたあるのだ。

これは、アユタヤの日本町に妻や子どもを残し、リゴールの地で戦っていた長政に、アユタヤ王宮の王と王妃が殺されたという一報が届き、日本町の今後を思案する場面である。ここで長政は、「この長政が……失敗る筈はない。」と断言しているが、この自信に満ちた言葉は、『メナム河の日本人』の長政特有のものである。では、『王国への道』での長政はどうかというと、手柄を王から認められ組頭になるよう言われたものの、突然の格上げに周囲の妬みをかうだろうと考え、長政自ら足軽になることを希望し、戦において手柄をたてても傲るところがない人物として長政は描かれている。このように長政は、強い意志とともに自分の出世のため立ち振る舞いに機転が利く人物なのだが、『メナム河の日本人』のように強い物言いをする人物ではない。この点は、『メナム河の日本人』の戯曲という表現構造が、長政の語調に強さを感じさせるのだろう。『王国への道』で描かれる長政の笑いは、『メナム河の日本人』ではト書きの部分にしか書くことが出来ない。つまり、長政を演じる役者がいかに長政を表現するかにかかっているのである。また、『メナム河の日本人』における長政の強い言い回しについても、戯

曲が台詞で構成されたものである点を考慮すると、この台詞を創作した遠藤自身が、台詞から判明できるよう長政に非常に強い性格を託したといえる。つまり、『王国への道』では、小説という表現方法を取っているが故に長政の強さは誇張されず、「人のよい笑い」で小説全体に、長政の人のよさを漂わせるが、実際は、非常な強さを抱いている人物として遠藤は長政を創作しているのであろう。

では、評伝『銃と十字架』では長政はどんな人物として触れられているのか。『銃と十字架』は岐部を追った評伝であり、長政の人物像の描写はないが、岐部がアユタヤに滞在した三年間の描写の中で長政について次のように触れられている。

> 長政とペドロ岐部とは、あの十七世紀初頭の日本人として同型の人間である。（略）彼等は共に日本をこえた国際人であろうとした。彼等は共に自分の創る国を夢みた。だが長政が地上の栄達を考え、日本を離れた場所に日本人の王国を得ようとしてリゴールに赴いたのにたいし、ペドロ岐部は日本に戻って神の国をそこに築こうとした。長政がその地上王国のために死を賭けたように、岐部もこの神の国に死を賭けた。地上の王国と神の王国。

ここで留意したいのは、「彼等は共に日本をこえた国際人であろうとした。」という一文である。長政と岐部を「国際人」と定義しているが、「国際人」というとプラスのイメージが思い浮かぶ。『広辞苑』（第五版　一九九八年十一月　岩波書店）で「国際人」と引いても、「広く世界的に活躍している人」と書かれてあり、肯定的な言葉として受取ることができよう。遠藤が、日本人として初めてエルサレムを訪れ、ローマの地で司祭になった後に迫害下の日本に帰国した岐部を「国際人」として扱うことには頷けるが、長政を「国際人」とする点は興味深い。なぜなら、長政はその半生を送った現在でいうタイにおいて、タイを侵略した外国人として否定的な人物として知られており、遠藤がこの点について不勉強であったはずはないからである。その長政を「国際人」というような肯定の意味で定義するということは、長政が日本を離れ他国で人生を送り、アユタヤ王宮から与えられた称号や貿易家の側面を評価しているということになるのではないか。

四　それぞれの長政像

では、『王国への道』以外で、長政はどのような人物として描写されているのだろうか。この点を探るため、いくつかの文献等から長政像を捉えてみたい。

日本において、初めて長政を描いた文献は『暹羅國山田氏興亡記』（一七三八年　発行月出版者不明）と『暹羅國風土軍記等』（発行年月出版者不明）である。これについて、村上直次郎は『六昆王山田長政』（一九四二年四月　朝日新聞社）の「序説」で、初めて長政に関して描いたであろう『暹羅國山田氏興亡記』と『暹羅

國風土軍記等』だが、この文献は発見された当初、すぐには受け入れられなかったようだとまとめている。そして、その後、日本とタイ両国に公使として在勤したことのあるサー・アーネスト・サトーの研究によって虚偽でない事が明らかになったと続けているのだが、それが判明したのが明治十七年(一八八四年)とあるから、この年以来、約百二十年の間、日本では長政が語られてきたわけである。

それではここで『王国への道』の長政から離れ、日本の文献や映画における長政の描かれ方について考察したい。この考察は、『王国への道』以外の長政描写を追うことで、逆説的に、遠藤の描いた『王国への道』の長政が担う日本人を抽出できるのではないかという試みである。

年代順に長政の描かれ方を追うことにするが、まず、長政に関する文献で特記すべきことは、ある時期に集中して刊行されているという事実である。それは、太平洋戦争が勃発した一九四一年以後の約三年間であるが、この時期の長政に関する文献を辿ると、我等の偉人刊行会による『我等の偉人』(一九四一年発行月不明　金の星社)や、沢田謙『山田長政と南進先駆者』(一九四二年五月　潮文閣)、中田千畝『日泰関係と山田長政』(一九四三年三月　日本外政協会)などが刊行されていることに気付く。タイトルや発行所名からも推測出来そうだが、この時期の長政伝は大東亜共栄圏の意識を強化するために、長政を海外で活躍した英雄として扱った文献が多い。例えば、中田千畝『日泰関係と山田長政』では長政について次のように述べている。

> 日本人多しといへども、出でて海外の國において大臣となり更に總督、王となつたのは、後にも前にも山田長政一人であつて、此の點だけから見ても、不出世の英傑として東洋史上に不朽の榮名を輝かすは實に當然といはねばならぬのである。と同時に、我々日本人の大いなる誇として、永く銘記すべきであるが、在暹足掛け十六年(自元和元年　至寛永七年)の彼が行動を詳に究明する時は、そこに日本人としての偉大なる力と愛との燦然たる輝きを認むることが出来るのである。

「日本人の大いなる誇」であり、「日本人としての偉大なる力と愛との燦然たる輝きを認むることが出来る」と誇張される長政は、海外で出世し、かつ認められた日本人として描かれてあり、第二次世界大戦において、われ等も長政に続けと言わんばかりに国策として日本の南進開拓の肯定を背負わされた人物なのである。

次に、第二次世界大戦以降の長政描写を辿ると、一九五九年に「山田長政・王者の剣」(加戸敏監督)という映画が公開されている。これは、初めての日タイ親善合作映画であるが、タイ側は王宮関係者の映画会社が携わっているものの、本編に登場するタイ人の配役はすべて日本人が演じており、日タイ合作といっても日本が主力となって制作されたようだ。ちなみに、主役である長政を演じたのは、当時、大映のトップスターだった

長谷川一夫であった。その彼の演じた長政であるが、どのような人物として描写されているのかを「朝日新聞」夕刊に掲載された記事「ロケ隊、タイへ」（一九五九年三月六日）から引用すると次のようである。

いまから三百年あまり前、御朱印船にもぐりこんでタイに渡った山田長政が、攻めこんできたビルマの大軍を破った手柄で王族にむかえられるが、とりまきの現地人にねたまれ毒殺される――その異国での生涯を描く。

この映画の長政像は、第二次世界大戦中の南進先駆者のような描かれ方は当然されておらず、「現地人に毒殺」という史実に沿った長政像であるが、タイの王宮関係者の映画会社が携わり、タイでも公開されたことを考えると、初めて長政像にタイ側の視点が入ったものといえよう。タイでは、王族関係を描く映画の公開は厳しく、アメリカ制作のタイの王族を描いた「王様と私」（一九五六年六月公開）は、タイ国内でマイナスの反響を呼び上映禁止とされている事からも分かるように、長政とともにタイの王族を描いた『王国への道』も、タイで上映禁止とならないよう、細心の注意を払って制作された映画といえるのである。

続いて、林青悟『山田長政』（一九八〇年三月　光風社）をみていきたい。この小説については、土屋了子が「山田長政のイメージと日タイ関係」（「アジア太平洋討究」所収　二〇〇三年三月　早稲田大学アジア太平洋研究センター）の中で分析している作品であり、必要に応じて土屋の論を引用しながら長政像に迫りたいと思う。

はじめに、林による本書の「あとがき」を引用する。

わたしは朝鮮渡航開拓民の一子弟であるが、終戦時に、われわれが現地でなめた辛酸は、筆舌に尽し難いものがあった。この、海外発展の悲惨な結末に直面した時、わたしは、日本人の海外移住ということについて、考えざるを得ない心境に追い込まれた。わたしは、自分における海外体験を率直に描いてみようと考えた。（略）そんな時、山田長政を海外雄飛の英雄であるとした明治以後の定説に対する疑問がわたしの中に生まれた。長政は毒殺され、アユチヤの日本町は長政と共に滅亡しているのである。ここに、海外渡航者のかくされた悲劇があるに違いない、とわたしは、自己の海外体験から考えた。

林はここで述べているように、「長政を海外雄飛の英雄」とすることに疑問を感じ、「海外渡航者のかくされた悲劇」として、自分が朝鮮渡航開拓民の子弟としての経験を長政に重ね合わせているわけで、この長政像は林独自のものといえる。林の描く長政は、本人がこの後に「あとがき」で述べるように、「海外移住を運命づけられた一団の日本人の生存のために、悪戦苦闘せざるを得なかった悲劇の指導者」として描かれている。ここで林が自身の海外移住と長政の海外移住を重ねている点は、遠

藤にも同様に重なる点であろう。遠藤は三歳の時に父の転勤で満洲・大連に移りそこで十歳まで暮らしおり、また、二十七歳の時には、戦後初めてのフランスへの留学生として海を渡り、当時の大連を海外とは言い難いだろうが、フランスでの生活とともにこの海外体験は、日本人としての自己を意識するきっかけになったという。つまり、林は悲劇をテーマに林自身を長政に投影している一方で、遠藤は長政に自己を投影しているとは言えないが、長政を描くというきっかけにおいて、日本を離れた日本人として遠藤自身と長政を重ね合わせたはずだ、ということである。

また、林の描いた『山田長政』について土屋は別の視点で指摘している。それは、林の『山田長政』では、「シャム人の日本人に対する反感によって長政は殺され、日本人町は滅亡していく」のだが、物語で描写されるシャム人らが長政たち日本人に反感を抱いている理由はそのまま、「太平洋戦争中に日本人が東南アジア諸国で行ってきた行為と同一」であり「七十年代前半にタイで生じた反日運動が批判した日本人像と一致する」という指摘である。ここで特に留意したいのは、後者の七十年代前半の反日運動である。これは、七十年代前半に日本がタイに経済進出し、それによるタイの経済赤字が市民の反日運動に発展したものだが、一九七四年一月十日付の「朝日新聞」には、第一面にこの反日運動の記事が掲載されている。「首相訪タイに学生デモの渦」という見出しに、「５０００人、反日叫ぶ」という副題がつけられたその記事には、東南アジア五カ国訪問のため、タイを訪れた当時の田中角栄首相に、七十年代前半からのタイ日両国の貿易の不均等と日本によるタイの経済支配を、日本の軍事運動と結び付けた学生が反日デモで訴える様子が掲載されている。記事によると、田中首相は「経済侵略反対」や「日本はすべてを奪う」「タイを搾取する日本」といったスローガンとプラカードのいわゆる逆歓迎を受けたとなっているが、土屋は、この反日運動と林の『山田長政』の中で「日本人は功利的すぎる。シャムの土地から搾りすぎるよ。うまい汁はみな日本人に吸われているから、シャム人は、いつまでも下積みだ。」とシャム人が語る日本人への反感は、同じものだとしている。このタイでの反日感情に関しては、遠藤もまた「朝日新聞」に寄せた「主観的日本人論」（一九七二年八月二十一日）と題した文章で触れている。遠藤は、一九七四年の反日デモではなく、七十年代前半から続いているタイを含む東南アジアでの反日感情を指しながら述べているのだが、「傭兵としての日本人　典型的な山田長政」という副題のもとに次のように語っている。

> 東南アジアの人々が日本の進出をどうしても武力進出として結びつけるのは、彼等の記憶に傭兵としてのイメージが残っているからではないか。

遠藤は、反日感情の中に武力進出の考え方があるのは、「傭兵としてのイメージ」があるからと仮定しているが、特に注意し

たいのは、この傭兵について、長政は典型的な日本人傭兵であると述べていることである。『王国への道』では、この長政を主役にしているわけで、「日本人とは何か」という問いに対して、長政を典型的な日本人傭兵として描き、その問いに答えていることになる。

最後に、一九八七年に刊行された小和田哲男による『山田長政　知られざる実像』（一九八七年八月　講談社）をみていきたい。小和田は「本書において、「侵略史観」を離れた長政の評価を試みたい」と述べ、文中で次のように長政の時代について述べている。

> 長政のことを見直す視角として忘れてならないことは、長政の時代がちょうど、日本史における「大航海時代」だったという点である。その後、鎖国になってしまったため、「海外へ出ていくのは命がけ」という意識が強くなってしまったが、十七世紀はじめの日本人は、小さな船を操って荒海に漕ぎ出していったわけである。（略）十七世紀はじめの三十年間で、日本から東南アジアの国々に渡ったのは数十万人といわれている。いかに日本の「大航海時代」であったかがわかろうというものである。

小和田は長政の時代を「大航海時代」として長政の貿易家の側面を評価しているのだが、遠藤もまた、長政を大航海時代の一人として見ており、「世界史の中の日本史」（「文学界」　一九七八年一月）のなかで、次のように語っている。

> いわゆる大航海時代とよばれるこの時代は多くの冒険家を生み、太平洋を乗りこえる船を作り、その航路を発見させた。すさまじいヨーロッパのエネルギイが東洋にまで及んだ時代だ。一方、日本はどうだったか。言うまでもなく日本人もこの時代、海の外に、海の外にと進出しようとした。東南アジアのあちこちに日本人町ができ、堺、博多、長崎の商人が海外貿易に力を入れた。

「大航海時代とよばれるこの時代」とは十六世紀から十七世紀はじめの戦国時代をさしているが、「東南アジアのあちこちに日本人町ができ」という中には、長政がいたアユタヤの日本町も当然含まれ、また、『王国への道』で長政が関係している貿易についても、ここでは日本側の視点だが「海外貿易に力を入れた」と語っており、長政をこの時代に生きた一人として捉えていることが分かる。そして、この大航海時代に触れた後、遠藤は次のように続ける。

> 「東洋と西洋」「西洋と日本」「日本人とは何か」という種類の本が近頃の本屋に山積しているが、残念なことに世界史のなかからみた日本の歴史という本を私はまだ見たことがない。

「世界史のなかからみた日本の歴史」を見たことがないと語る遠藤だが、この後執筆された『王国への道』は、この「世界史のなかからみた日本の歴史」を実践した小説といえるのではないだろうか。タイのアユタヤ王朝に政治的に関係した長政を描き、また岐部についても、日本を離れたきっかけは禁教令による国外追放であったが、その後、日本人として初めてエルサレムを訪れ、ローマに渡ってからは殉教を覚悟して日本に戻ってきたいわば世界を半周しているような岐部の姿は、世界史の中の日本史を視点に選出した人物と考えられるのである。

以上、長政が描かれた文献、映画をいくつか挙げ、それぞれの長政像をみることで逆説的に『王国への道』の長政像に迫る一階段を上ったつもりだが、では、実際に『王国への道』では、どのような日本人として長政及び岐部、またその他の登場する日本人は記述されているのか。これについて本文を辿りながら、読み進めたい。

五　日本人とは何か

まず、「日本人の弱さ」[6]についての日本人描写を追っていきたい。舞台が日本からマカオ、そしてアユタヤへと移っていく過程で、長政を軸としてこの「日本人の弱さ」は語られるが、はじめにそれが語られるのは、次のような場面である。

「日本人の欲しがるもの？」

「そう、米。醤油。味噌」

老人は皮肉に頬をゆがめて笑った。

「日本の刀もある。鉄砲もある。そして……雛人形」

「雛人形までも……」

さすがの藤蔵が眼を丸くすると老人はうなずいて

「日本人はおかしい。どんな土地にいってもその土地の食べもの、気風に馴れないな。日本にいた時と同じに暮そうとする。だから、この品物を悦んで買ってくれる。それが……日本人の弱いところ」

これは、長政がアユタヤ行きを決めたマカオの地で、阮子竜からアユタヤとマカオ間の取引について説明を受けているところである。このいわゆる長政が関わっていく貿易で、日本人が日本の食べ物を欲しがり、かつ日本式に暮らしていたことは、三木栄の『山田長政』（一九三六年十二月　古今書院）を読んだ遠藤が、「いちばん面白かった」という箇所であり、そして当時の日本町の日本人の生活として『王国への道』に反映させた部分である。

また、「日本人の弱さ」について触れられる別の箇所は、アユタヤでの生活を始めた長政が抱く次のような心中である。

町から離れたメナム河畔の日本人町には約三百人ほどの日本人が住んでいるがこの三日間に藤蔵が会った連中の多くは、いつか日本に帰国することばかり考えているようだっ

た。彼等のなかには関ヶ原の戦さで主君を失った牢人たちもおれば、またあのマカオの岐部のように迫害を逃れてここに来た切支丹の信徒も多く混じっていたが、このシャムに住みながら未だに日本での生活をそのまま変えていないのもマカオの阮子竜が指摘した通りだった。

「藤蔵が会った連中の多くは、いつか日本に帰国することばかり考えている」とあるが、これは、直々に日本町についての指導も受けた岩生成一の著書『鎖国』（一九六六年三月　中央公論社）が、遠藤にこの一文を書く基を与えたようだ。その『鎖国』を引用すると、「日本町の人々」という章において、「日本町の発展の前途には致命的な障害」は「日本人は渡航先に定住せず、すぐに帰りたがること」となっている。また、岩生は、遠藤との対話集『日本人を語る』（前掲）の中でも「日本人の弱さ」について触れており、日本町の研究はそこにいた西洋人の記録によるものだと話しながら、次のように語っている。

大体、日本人は居つかずに、来たらすぐ帰るということがよく書かれていますね。（略）向うで日本人町を経営した人は、よくよくのことで残っているわけでしょうね。経済的に地盤のできた人やどうしても帰れない人です。ほかの人はしょっちゅう帰って、住む所が決らない、ということをスペインの宣教師が書いています。

遠藤はこれを受けて、アユタヤの日本人が「いつか日本に帰国することばかり考えている」と長政に抱かせているわけだが、「しかしなあ、日本に戻りたいものよな」と嘆く津田又右衛門は牢人であり、「この土地にやむなく移り住んだ俺たちも家郷の夢を見る日が時々ある」とぼやく男はキリスト教徒なのか、岩生の指摘する「どうしても帰れない人」に属するのだろう。

ここまで、二点の「日本人の弱さ」の記述を追ったが、問題はなぜ遠藤は日本町の日本人に、この弱さを内包させたのかという点である。この問題を、遠藤が『王国への道』を通して見つめた「日本人とは何か」という問いに対する一つの回答、すなわち現在に続く日本人の弱さを示したと見なすのは勿論である。それは、遠藤が「主観的日本人論」（「朝日新聞」　一九七二年八月二十一日）の中で、この日本人の弱さに触れた後、この弱さを現在に置き換え、次のように語る事からも明らかだ。

パリやニューヨークで今日、日本人の留学生や商社の人が同じアパートに住み、日本料理をつくって生活しているのと同じであろう。

日本町に生きた過去の日本人から、海外に住む現在の日本人の姿を見出すという行為は、『王国への道』という歴史小説が有効に機能していると言えるのではないか。また、遠藤が日本人の弱さを描いた別の理由として、先ほど触れた遠藤の言う「世界史のなかからみた日本の歴史」の視点が関係している。つま

り、日本国外に形成された日本町を振り返るとき、一つの理由として日本人特有の弱点がその日本町を退廃の一途を辿らせており、それは世界史の中の弱者として抽出できるのである。それは、一見プラス思考で世渡りが上手い長政の描写の陰で隠れているものの、日本町の日本人たちは弱者としての日本人を担っているのだ。

以上、「日本人の弱さ」について本文を辿りながら読み進めてきたが、今後は、戦・女性・アユタヤ描写に注目し、遠藤が『王国への道』を創作した理由について稿を進めていくことを課題としたい。

【注記】

1　初出は雑誌「太陽」（一九七九年七月～一九八一年二月）、単行本（一九八一年四月　平凡社）、文庫本（一九八四年三月　新潮文庫）。

2　長政についての概要は、国史大辞典（第十四巻　一九九三年三月　吉川弘文館）に拠った。

3　岐部についての概要は、国史大辞典（第十二巻　一九九一年六月　吉川弘文館）に拠った。これによると、一六一四年の禁教令によってマカオに国外追放をされた岐部は、その後自力でローマに赴いたが、その間の旅路については不明な点が多いとされる。この点について、フーベルト・チースリクは『世界を歩いた切支丹』（一九七一年六月　春秋社）の中で「ペドロ岐部がこの冒険的な旅について日記を残さなかったことは、実に惜しいことだ。」としている。

4　加藤宗哉『遠藤周作』（二〇〇六年十月　慶応義塾大学出版会）には「遠藤周作年譜・著作」が付録されており、その一九六五年の年譜には、「上智大学チースリク教授のもとで切支丹史の講義をうける」と記されている。

5　遠藤周作自身は「女王」を戯曲の処女作としているが、実際は、一九五九年に劇団「同人会」のために書き下ろした「親和力」が最初に描いた戯曲である。しかし、「親和力」は戯曲の練習のようなものとだとした遠藤はこの戯曲を処女作として定めていない。

6　『王国への道』に登場する阮子竜が長政に語った「それが……日本人の弱いところ」からの引用。

（九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年）